

---

# とあるリリカルな転生者

トーマ&リリィ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるリリカルな転生者

### 【Nコード】

N6945X

### 【作者名】

トーマ&amp;リリイ

### 【あらすじ】

自称偽善者の少年は子供を助けるために死んでしまったそれを見ていた、神様によってリリカルな世界に転生をすることに！  
色々な能力をもらった少年は一体どんな物語を織り成すのか

これは処女作です。下手なので、いろいろ教えてください

## プロローグ

「ふあ〜、いい天気だな」

朝、いつもの様にベッドから起きた俺はカーテンを開けて呟いた。

「今日は、何をするかな？・・・そうだ、確か今日は、集めてる漫画の発売日だなあ…よし、買いにでも行くか」

本を買いに行くことにした俺は、朝ごはんを食べて家を出発した。

「それにしても、今日はホントに、いい天気だな。こんな日は何か良いことでもあるかもな。」

本屋に着いた俺は、本を買って家に帰ろうと歩いていて、ふと道路見たら、ボールを追いかけてきた子供が道路に飛び出していた。

「なっ、あ、危ねえ！」

見てみると、車が向こう側から突っ込んでくる。このままじゃ、あの子供は死んでしまう！

気づいたときには体が動き出していた。そして、道路に飛び出して子供を突飛ばした、そこで彼の意識はなくなった

## プロローグ2（前書き）

いや〜さっそくだけどネタがなくなってきました・・・  
まだプロローグは続きます。

## プロローグ2

「ん、ここは・・・どこだ？」

気が付くと、俺は真っ白な空間にいた。

とてつもなく広い空間なのか、白い空間は見渡す限り何処までも続いていた。

「まあ、いつかどこでもいいしとりあえず眠たいから寝るか」  
と言って俺は寝ようとしたら・・・

「おい、起きろアホ」

といきなり罵倒されながら起こされた。

俺は起こされた方を見ると、見知らぬ幼女がいた。

「・・・誰だ？あんた」

と俺は幼女にたずねた。

「ん？私か？私は・・・神だ」と言って俺を見てきた。

（なんて・・・痛々しい子供なんだ。）

と俺が思っていたら

ゴンッ

「痛ってえええええ！」

「痛々しいとか言うからだ！」

（な、何でだ？何でこいつ俺が考えてることが分かったんだ？それに、今の一撃もなんて重く鋭い一撃なんだ、もしかして幼女ではなく幼女の皮を被ったゴリラなのか？）

「私はゴリラなんかじゃない！」

（まただ、俺の考えてることが向こうに筒抜けだ・・・まさか本当に神なのか？）

「だから、私は神だと言ってるでしょ」

と（自称）神は自信満々に俺に向かって言ってきた。

## プロローグ2 (後書き)

・すみません、m( | | ) mまだ、プロローグは終わりません。プロローグは多分次ぐらいで終わるかと思っています

## プロローグ3 (前書き)

今回の話は結構無理やり感があります、すみませんm( )m  
それではどうぞ



いでしょー」

数分後

「はあはあ、や、やっと落ち着いたみたいね」

「はい・・・落ち着きました」

「で、あなたが転生する世界だけど「ちょっと待て」・・・何よ？」  
「何で俺が転生するんだ？よくわからないけど、転生なんてことをするなら理由があるだろ？」

「それは・・・実はあなたが助けた子供はあの車にはほぼ確実に死ぬ予定だったの、でもあなたは自分の人生を潰してまであの子供を助けた、それにあなたの人生は良いことしたわりに、不幸なことばかりで可哀想だったからよ」

「そうか・・・ところでどこの世界に転生するんだ？」

「あなたには『リリカルなのは』の世界に逝ってもらおうわ」

「・・・『リリカルなのは』か・・・いろいろやりたいから、なんか能力とかくれるか？それと原作を破壊したいけどいいか？後『いく』の字が違うぞ」

「ふふ、優しいのね？原作については壊してもいいわ、行ってもらう世界は『リリカルなのは』の世界に限り無く近い平行世界だから、

能力はあなたが欲しいのと言って頂戴」

「ありがとう、別に優しいわけじゃないさ、ただの自己満足さ……」

（そうさ、あの時だって俺の自己満足のせいであいつは……くそ過去を後悔しないって決めたんだ、今さら後悔してどうするんだ……）

「そう？まあいいわ、能力はなににする？」

「じゃあ、金色のガッシュに出てくる呪文、アンサートーカーの能力、ドラクエとテイルズに出てくる魔法も頼む」

「分かったわ、後私の好みの能力もつけとくわ」

「そうか……ありがとう」

「ガッシュの呪文、テイルズとドラクエの呪文はあなたの魔力を媒体にして使うからね、魔力に関しては、あなたの生前のリンカーコアを使うから」

「おい、ちょっと待て、今リンカーコアって言ったな？俺にリンカーコアなんて有ったのか？」

「ええ、有るわよ、しかもあなたとんでもない魔力を持っているわよ」

「だったら、なぜ俺は前世で魔法が使えなかったんだ？」

「それは、あなたの世界が魔法を認めなかったからよ、魔法が世界から認められなかったら魔力が有っても魔法は使えないわ、大体魔法があるなんて知らなかったでしょ？」

「確かにそうだな・・・分かった・・・よし、じゃあそろそろ連れてってくれる」

「待って、まだデバイスとあなたの名前を決めてないわ」

「そうだったな、じゃあデバイスはユニゾンデバイスで頼む」

「分かったわ、名前はどっする？」

「名前はあるが決めてくれ」

「分かったわ、じゃあそろそろ行く？」

「ああ、そうするよ」

「そう、じゃあ逝ってらっしゃい」

「え、ちょっとまって・・・うわっ!」

そういうと突然、俺のいた場所の真下に穴が出来て、俺は落ちていった

「はあ、やれやれ」

### プロローグ3（後書き）

えっと、アンケート？というか主人公の名前とデバイスの名前を募集しています・・・後ご意見や感想また、指摘や誤字の訂正などをしてくれるとありがたいです これからも、よろしくです

現状の確認と意外な事実？（前書き）

遅れました、第4話です、どうぞ

## 現状の確認と意外な事実？

「ん、ここは・・・」

気が付くと、俺は青空を見ていた

「あ、起きた」

声が聞こえた方を見ると、黒い綺麗な髪の女の人がいた。

「・・・は？誰だ？お前」

「私はあなたのデバイスのソラよ」

(・・)(エツ・・?エエエ)(。。(「エエエ

勝手に決めるとは言ったけど、まさか人型デバイスだとー！  
？

「あつ、そうそうあなた宛に手紙がポケットに入ってたから渡すわ」と言っ  
て手紙を渡してきたソラから手紙を受け取った俺はさっそく読んでみた

「あなたが手紙を読んでいるということは、無事に送れたみたいね、えつとあなたはソラと二人暮らしって言うことになってるから、後お金は手紙の中に通帳が入ってるからその中にあるわ、後家の住所も入ってるわ・・・まあこのくらいかしら？」

あ、そうそうあなたの年齢は5才って事になってるからね、ちなみ

に送った時代は・・・な忘れたわ、他に聞きたいことが有ったら、電話してね」

・・・まあ、なんつうか適当だな・・・手紙を読んだ俺の感想はそんなかんじだった

ていうか、俺の見た目5才か...ということは小学生からやり直しかな？送った時代がわからないのはキツいな・・・

あっそれより手紙の中をチェックしなきゃ

手紙の中を見てみると、家の住所と神様のメアドと電話番号、通帳が入っていた・・・

さっそく通帳の中身を見た俺は驚いた、なんなんだ？この果てしない金額は・・・こんだけありゃあ、一生遊んで暮らせるだろ・・・

まあいいか、ないよりはあったほうがましか

とっ考えてたらいつの間にか、俺の前にいたソラが

「これからよろしくね、妹ちゃん」

と言った・・・

## 現状の確認と意外な事実？（後書き）

あーー主人公の名前が決まらない

というわけで、まだ主人公の名前を募集してます、主人公の名前は要望が無い場合は、友達と考えます

**前世の名前を名乗ると人は後悔する（前書き）**

主人公の名前を友達と覚えてやっと決まりました！（〇。〇）  
後遅れてすみません、ではどうぞ

## 前世の名前を名乗ると人は後悔する

・・・はい？今コイツは何て言った？

「これからよろしくね、妹ちゃん」

だと、まさか俺に言ったのか？

(でも俺は男だしな・・・誰に言ったんだ？

一応俺かどうかの確認しとくか)

「おい、妹って誰の事だ？まさか、俺のことじゃないだろうな？」

「へ？あなたの事よ」

「は？俺のどこを見れば女と間違えるんだ？」

(コイツは何を言ってるんだ、俺は男だというのに)

「うーん、あなたの顔や体つきから女の子って判断したんだけど・・・  
もしかして、違ったかしら？」

(・・・顔や体つきからだ・・・馬鹿な俺の顔はどう見たって男  
のはずだ・・・)

「さっき、顔や体つきから判断したとか言ったよな」

「ええ」「俺の顔はどう見たって男のはずだ、それなのに、なぜ間違えるんだ？」

と俺が言うとソラは驚いたような顔をしていた・・・そんな変な事を言  
ったか俺？

「はあ、気づいてないの？ほら、鏡を見なさい」

と言ってソラは俺に鏡を渡してきた

「鏡を見たってどうせ何も変わってな!？」

鏡を見た俺は驚いた、そこに写っていたのは俺の顔ではなく黒い髪の毛をした女の子がいたからだ

「お、おいここに写っているのは…まさか俺か？」

「そうよ、妹ちゃん以外に誰が写っているのよ」

(まさか年齢だけでなく顔まで変わっているなんてな…どうしよう、男の娘なんて現実にいるなんてな、しかもそれが俺だなんて…はあ〜やだな)「まあ、顔と体つきが女なのはいいがそれでも俺は男だ、だから妹ちゃんなんて呼ぶなよ」

「わかったわよ、じゃあ、名前で呼ぶわ」

(よしこれで妹ちゃんなんて呼ばれないな)

「…よく考えたら私名前を知らないわ、ねえ名前を教えて？」

(あつ名前か〜そういえば、言ってなかったな…)

あれ？俺の名前って前世のやつを使えばいいのか？それとも新しい名前とか手紙に書いてあったかな？)

さっそく俺は手紙を見てみたが名前なんて書いていなかった。どうしようかな？

「まだ名前教えてくれないの？」

(まあ、前世の名前でいいか)

「あゝ俺の名前は朝霧葵だ。これからよろしくな」

ソ「・・・」

葵「ん？どうした？ソラ」

ソ「あはは、あなた顔だけでなく名前まで女の子みたいね」

葵「それを言うなああああ」

くそ、その名前のせいでよくからかわれたから違う名前を名のつくんだつた

ソ「そんなに怒らないで、そろそろ一回家に行ってみない？」

葵「ちつ話をそらしたな・・・まあ良いじゃあ行くか」

神からの手紙に入っていた地図を見ながら俺とソラは家に向かっていった

**前世の名前を名乗ると人は後悔する（後書き）**

遅れたわりに文が短くてもし期待している人がいたらすみません、  
がんばって1週間に二回は投稿するようにします

家と葵の料理の実力（前書き）

物語が進まない

原作キャラにはいつ会えるんだろ

それではどうぞ

## 家と葵の料理の実力

葵「これはあり得ないだろ」

家に着いた俺の最初の言葉はそれだった

えっ？何であり得ないかだって？

だって・・・

葵「大きすぎだろおおおおお！」

ソ「ど、どうしたの？急に叫んで」

葵「いやいや、これはいくらなんでも大きすぎだろ、だってこれから二人つきりで生活するにはどう考えても大きいだろ」

ソ「葵と二人つきりでの生活・・・ボンツノノ」

えっ？そんなに大きいかだって？

考えてもみるこれから隣でいきなりキャラ崩壊してるソラと二人で生活するのに、周りの家より2、3倍大きな家ってあり得ないだろ？ていうか、ソラのやついきなり顔を真っ赤にして・・・風邪か？

葵「まあ、いいか。おいソラとにかく一回家に入るぞ」

ソ「あっ、う、うん」

あれ？そういえば鍵持ってないけど何処にあるんだ？と門（といってもそんなに大きくない）を通った俺は思っていた

葵「だから、あり得ないだろ」

またまた同じような発言をした俺えっ？また何で同じようなことをいったかって？だってよ

葵「指紋認証で家が開くってどんだけだよ、下手するとオーバーテクノロジーだろ」

ソ「どうしたの？早く家に入らないの？」

葵「ああ、もう疲れたから入ろうか・・・」

と言って家に入ってみたわけだが・・・

ソ「さっそく家の中を探検してしよー」

とはしゃいでるソラと探検する事に・・・

俺疲れてたって言ったよな？

（家の中探検中）

葵「っ、疲れた」

今俺はリビングのソファの上でぐったりしている

なんと驚け、家が広すぎる上に隠し部屋まであるせいで、昼前には家に着いていたはずだが、今はもう夕陽が窓から家に射ってきている

葵「あー家が大きいのも考えものだな、疲れたからしばらくのんびりするか」

と俺がのんびりしようとしていたら、ソファで寝っころがっているソラが

ソ「ねえ、葵く疲れたし、お腹減ったよーなんか作って」

と言って駄々っ子のようになっている

くそっ誰のせいで疲れたと思ってるんだ

しょうがない疲れてるけど、ご飯を作るか

キッチンに行って冷蔵庫の中を見た俺は

葵「おっ 意外と色々入ってるな これなら、少しだけ明日買いにいけば良いな、そうだな・・・おーい何が食いたい？」

ソ「葵の作れるもので良いよ、どうせチャーハンとかでしょ」

葵「ふっ甘く見たな、お前の考えが甘いことを見せてやる」

しかし、何を作ろう・・・パスタがあるからパスタかな

よし、海鮮パスタにするか

～ 葵料理中 ～

葵「できたーよし後最後にパセリをのせて出来上がり」

ソ「葵く料理できた〜?」

葵「ああ、出来たぞじゃあ食べるか」

俺が料理が出来たと聞くとテーブルに座って待っている

葵「それじゃあ」

葵ソ「いただきます」

ソ「・・・」

葵「ん?どうしたソラ?美味しくなかったか?」

そう、ソラが料理を食べはじめてから一回の喋っていないのだ

葵「味付け間違えたかな?」

ソ「お・・・」

葵「お?」

ソ「おいしいー!すごいよ葵　こんなに美味しいなんて私思わなかったよ」

葵「そ、そうか」

どうやら、味付けは間違ってたなかったらしい味もお気に召したら

い、でも何で黙ってたんだ？

ソ、でも、こんなに美味しいと女として負けた気が・・・orz」

美味しいと言って上機嫌で食べてたら、急に落ち込んだな・・・何故だ？

## 家と葵の料理の実力（後書き）

作者「さっそくフラグを建てたか・・・」

葵「フラグってなんのことだ？」

作者「・・・鈍感だな」

作者「ていうか、ソラはこいつのどこが好きなんだ？」

ソラ「可愛いところかな／＼」

葵「ん？ソラ、やっぱりお前風邪か？」

作者「・・・がんばれよソラ」

ソラ「・・・はい頑張ります」

葵「おいなんなんだよ、おい」

作者「え〜こんなぐだぐだな感じですが次回もよろしく願いします」

葵「ちよっ勝手に終わるな、説明しろおおお！」

**能力の確認とツインテールの女の子との遭遇？（前書き）**

一つ疑問なんです、なのはのお父さんの入院してた時期って小学  
生入る前で合ってますかね？

それではどうぞ

## 能力の確認とツインテールの女の子との遭遇？

あの後、風呂に入ろうとしてたらソラと一緒に入ろうと言ってきて、全力でそれを防いだり、やたらくつついてくるのを防いだり、一緒に寝るのを防ごうとしたり（防ぎきれなかった）して疲れたしかし、何故疲れたんだ？

作者「ソラのせいだろw」

ん？今謎の電波が飛んできたような？

あつ今俺は神にもらった能力の確認のためにソラと一緒に近くの山に來ています

ソラ「じゃあ結界をはるよー」

葵「わかった」

まずは何の能力を試すかな・・・  
いや、まずは魔力の量でも測るか

葵「ソラ俺の魔力量を測ってくれないか？」

そう普段はダメな感じなソラだが実は無駄に廃スペックなデバイスなので、魔力量を測るなんて朝飯前らしい

ソ「えっと、葵の魔力量はA+くらいね」

葵「それってすごいのか？」

あれっ、神がとんでもない魔力って言うってたけど、原作キャラ達の魔力量ってAAAランクくらいあった気がするから・・・そんなに多くないか？

ソ「うん、だいぶスゴいよこれだけあれば余程の敵でない限り魔力が切れるなんてことはないよ」

葵「ふ〜ん、まあ魔力はそんなに気にしないけど、まずは色々な呪文を使ってみるか」

葵「・・・ザケルガ」

力をイメージして呪文を唱えた瞬間、手から貫通力のある雷の閃光がでて近くの木を貫いていった

葵「・・・ザケルガでこの威力とか・・・これがバオウザケルガだとどうなるんだよ」

ソ「今の技中々すごい技ね」

葵「でも追尾性能も無いから威力と攻撃距離だけだぞ」

ソ「そうだけど、威力の割に魔力消費量がとても少ないから結構な回数使えるよ」

葵「ふ〜んそうなんだ、次は何の技に使用かな・・・よし決めた」

葵「・・・ジゴデイン！」

黒い雷をイメージして唱えると、莫大な質量を持った雷が現れ、境界内を全て黒焦げにしていた

葵「・・・凄いな」

ソ「確かにものすごい威力ね、それにこれって非殺傷設定でしょ？葵が殺傷設定のまま技の練習なんてしないと思ってたし、それより今の技すごいけど魔力消費量がとても多いでしょ？葵の魔力量じゃあそんなに使えなわ、魔力消費して疲れたでしょ？休憩しよ？」

葵「ん？別に疲れてないけど？」

ソ「そんなはずあるわけ・・・！？」

葵「どうした？」

ソ「いえ、何でもないわ、疲れてないなら技の確認の続きをしましょうか？」

ソ「side」

おかしい、葵の魔力量でさっきの技を使ったら魔力の大半を持ってかれる筈なのに・・・どういうことかな？

葵「ソ〜ラ〜、技の確認の続きを早くしよ？」

ソ「あ、うん」

まあそのことはまた今度でいつか

ソ「side out」

いや〜疲れたな、それにしても神のやつまさかとある系の技が使えるなんてな、超電磁砲が撃てるなんて凄いな、まあ能力を使いすぎると頭が痛くなるのが超能力の欠点か・・・

それにしても、ソラやつなにか

「私疲れたから先に帰るね、後帰りにアイス買ってきてね」  
だよ全く・・・

俺がアイスを買うためにコンビニに行こうと公園の前を通り過ぎようとしたら、泣いている声が聞こえたので俺が公園の方を見てみると、悲しそうな顔をしたツインテールの女の子がいた

葵「どうなってるんだ、こんな話知らねえよ・・・」

能力の確認とツインテールの女の子との遭遇？（後書き）

作者「使えるよ技多いな」

葵「お前が決めたんだろ」

作者「いや俺だけじゃねえよ決めたの」

葵「じゃあ誰と決めたんだよ？」

作者「友達と決めたんだよ」

葵「お前友達いたのか」

作者「い、いるよ5、6人くらいわ」

葵「うわ、すくなっ」

作者「少ないとか言うなよ……」

葵「こんな作者ほっといつかなあ？ソラ」

ソ「やっと出番きた……（T・T）」

葵「あーもういい、今回もダメ作者のせいでぐだぐただけどここれからも宜しくな」

作者「ダメ作者って……orz」

「！」「ぎっ」「！」

子供を一人にさせるな！（前書き）

初めての感想を頂きとても嬉しかったです  
今回の話は今までで一番長いです、それではどうぞ！

子供を一人にさせるな！

前回のあらすじ

能力の確認 帰り道に公園でツインテールの女の子発見

葵「関わらんどころかな？」

葵は最初関わらないことにしようと思った、しかし泣いてる顔を見ると

葵「・・・やっぱり俺は偽善者なのかな、人の泣いてる顔なんか見たくないや」

と言うと葵はツインテールの女の子の前に立ち

葵「こんにちは、泣いてるけど大丈夫か？」

と言った

くなのはside

私は一人で公園に居るの、遊んでくれる友達も居ないからとても寂しいの

公園に居た他の子も皆家族と遊んで帰っていったの、でも私には遊んでくれる家族は居ないの、迎えにも来てくれないの

お父さんが入院しちゃってお母さんたちはお店に忙しいのだから、

私はいいこにしてないといけないの

そう思っていたらとっても悲しくなって目から涙が出てきちゃうの、一旦出てしまった止まらなくなって泣いていたら

「こんにちは、泣いてるけど大丈夫か？」

知らない女の子に話しかけられたの

（なのはside out）

勢いで話しかけちゃったけど俺やばくね？知らない人に話しかかれるとか怖いよ

あれもしかして

泣いてる女の子に話しかける 知らない人から見ると男の人が女の子を泣かしてる 犯罪の匂い 通報 逮捕  
じゃないか？・・・もしかして終わった？

と一人で考えていたら

「あの～大丈夫ですか？」

と言われた

あつこっちが心配されちゃったよ

葵「ああ大丈夫だよ、それより君こそ泣いていたけど大丈夫なのか？」

そう俺が気になったのは何でもう薄暗くなってきた公園に一人で泣いていたかということだ、親とか友達とかいないのか？

「だ、大丈夫です。後泣いてなんかいませんから、心配しないでく

ださい」

葵「はあ、涙目で言われても説得力ねえよ、ほらまずはこれで涙を拭け」

と俺はハンカチを目の前の女の子に渡した

「あ、ありがとうなの」

とハンカチを受け取った女の子に俺は

葵「それにしても、お前一人か？親、というか家族や友達はいないのか？」

と俺が言うと

「家族・・・う、うわああああああん」

突然泣きながら抱きついてきた

突然のことで焦ったけど

葵「なにがあるか知らないけど、今はおもいっきり泣いとけ」

と言って泣いてる女の子を受け止めていた

くなのはsideく

家族のことを言われた、私はとても悲しくなって思わず、抱きつい

て泣いてしまった、すぐに離れようとしたけど

「なにがあるか知らないけど、今はおもいっきり泣いとけ」

と言われて、泣き止むまですっと抱きついてた

〈なのはsideout〉

〈数分後〉

葵「落ち着いたか？」

「う、うん落ち着いたの、ありがとうなの」

葵「いや別に、俺は何にもしてないよ」

「そんなことないなの、私とっても嬉しかったの本当にありがとうなの、えっと……」

葵「どうしたの？」

「あっその名前がわからなくて」

葵「あっそういえば言ってなかったね、俺の名前は葵、朝霧葵だ宜しくな」

「私の名前はなのは、高町なのはよろしくなの葵ちゃん」



な「ふえ？」

葵「俺がお前の友達になってやる！」

「なのはside」

「俺がお前の友達になってやる！」

私はこの言葉を聞いた瞬間とっても嬉しかったの、だってずっと一人でいて寂しかった私と友達になってくれるってことだから、だから私は

な「うん、よろしくなの」

とても笑顔で返事ができたはずなの

「なのはsideout」

な「うん、よろしくなの」

俺はこの言葉を聞いて安心した、もしこれで迷惑がかかるからとか言って、断ったら、年の割にすごく大人になってしまった・・・いやならざるなかったかな？とにかく、まだ子供で良かったと思う、だって悲しいじゃないか、何かしらの温かみのない幼少時代なんて・・・まあこれも俺のエゴなのかも知れないけどな・・・

葵「よし、じゃあ明日から遊ぼうな！」

と俺が言うと

な「えっ今から遊ばないの？」シユン

と落ち込んでしまった

葵「遊んでもいいけど、お前そろそろ帰らなくていいのか？」

そう、なのはと会った時が夕方だったから、それからだいぶ時間が経って今はもう暗くなっている

な「あっもう真っ暗だ・・・皆帰ってきてるなの、怒られちゃうかもなの」

葵「はあ、しょうがねえ付いて行ってやるよ」

まあ、暗くなるまで公園にいたのも俺のせいだしな

な「ありがとうなの」

葵「はあ、しょうがねえ付いて行ってやるよ」

まあ、暗くなるまで公園にいたのも俺のせいだしな

な「ありがとうなの」

と言っとなのはと一緒になのはの家に来たわけだが

いざ玄関を開けようとしたら向こうから開いた

そして、中から黒い髪をしたイケメンな男の人が出てきて

「なのは、こんな遅くまでどこに行ってた？心配したんだぞ、後君がなのはをつれ回したのか？」

と殺気を飛ばしながら尋ねてきた

な「お、お兄ちゃん！葵くんは、何にも悪く・・・」

「なのはは黙ってる！」  
ぶちっ

俺の中で何かが切れた気がした

葵「おい、俺お前なのはの兄なんだってな、名前を教える」

「そんなことはどうでもいいから、質問に答えろ！」

葵「うるせえ、名前を教える！」

と俺が低い声でいった

「ちっ、俺の名前は高町恭也だ、君の名前は？」

葵「俺の名前は朝霧葵だ、さっきの質問に対してだが、もしなのはをつれ回したのが俺だったらどうするんだ？」

と俺が挑発すると

恭「もしそうなら、今後一切『俺たち』のなのはに近づくな！」

葵「・・・ふざけんな」

恭「なに？」

葵「ふざけんなって言ったんだよ！なにが『俺たち』のなのはだ！そのなのはがどんな気持ちでいたと思っっている！

まだ幼いこいつが、『良い子にしなきゃいけない』っていったんだぞ！一番家族に甘えたい時期の子供が自分の気持ちを押し殺してるのに、友達までなのはから奪う気でののか！」

恭「んなつ！俺たちのことを何も知らないでわかったような口を言うな！」

葵「ああ、俺はお前たちの事はほとんど知らないな、だが自分の家族のことをほつたらかしの奴らのことなんか知りたくないな」

恭「い、いや俺たちはなのはのことをほうってなんかいな「ふざけんな」っ!？」

葵「ふざけんなよ・・・なのはは泣いてたぞ、一人ぼっちで公園で泣いてたんだぞ・・・それでもお前はいやどうせずっときいてんだろ？」

なのはの他の家族もまあ、そのままでいいがお前たちに一つ聞いたい、お前たちはなのはとお店どっちが大切なんだ？」

恭「そ、それはもちろん「なのはです！」！！」

俺が一つ質問をしたら恭也が答える前になのはの家族が出てきた

な「お母さん！」

葵「お前がなのはの母親か・・・おい今なのはと店でなのはの方が大切って答えたな？ならなぜなのはを一人にさせた！」

「それは・・・なのはも大切だけど、店も大切だったから・・・」

葵「確かに店が大切なのもわかる、店がなくなったらなのは達に「飯を食べさせてやれなくなるしな、だけど、それでもなのはをずっと一人にさせたのは間違いじゃないのか？」

「はい、わ、私達が間違ってたのは悪かったと思ってます・・・」  
めんなさい」

葵「はあ、俺にじゃないだろ謝るのは」

「そうですね、なのは今まで一人にさせてごめんなさいね、これからはなるべくなのはのための時間を作るわ」

な「お、おかあさあああん」

あらあら、泣いちゃったかそれにしても・・・なのはのためとはいえ、言い過ぎたかもな

葵「さて、俺はそろそろ帰るとしますよ」

と俺が空気を読んで帰ろうとすると

恭「ちょっと待ってくれ、一つ質問させてくれないか？」

葵「いいですよ」

恭「君はなぜなのはいや友達のためにあんなに怒れたんだ？」

葵「・・・これは俺の自己満足かもしれませんが、もう誰かが泣いてるところを見たくないんですよ、それに家族がいるのに構ってくれないなんて寂しすぎるじゃないですか」

恭「まさか、君のご家族は」

葵「いいんです、済んだことですから、だから今まで遊んでやれなかった分なのはとたくさん遊んでくださいね、後なのはを一人にさせないでくださいね？」

恭「ああ、これからののはを一人になんかさせないさ、後俺に・・・いや俺たちに大切なことをわからせてくれてありがとう」

葵「いえ、俺は何にもしてないですよ、では帰りますね」

と俺が帰ろうとすると

な「もう帰っちゃうの？」

となのはが寂しそうに聞いてきたから俺は

葵「ああ、帰るさ」

でももう会えなくなるわけではないよ、たまには遊びにくるさ、だ

からそれまでまたな」

な「うん、わかったな絶対、絶対遊びにきてなの！」

葵「ああ、わかったじゃあまたな！」

と俺は言つと家に向かって歩いていった

結局俺は偽善者なのかな、いやただの罪滅ぼしなのかもな、人を助けて自分の罪を軽くしたいと思っっているのかも知れないな・・・

この後家に帰った俺は、帰るのが遅かった上、アイスを買ってこなかったせいでソラに怒られたのだった、あれ？なんか損じゃないか？

子供を一人にさせるな！（後書き）

作者「さあ、本編に登場のなかったソラさん」

ソ「何？とゆうか何で登場なかったの？」

作者「えつと登場のなかった理由ですか・・・」ダッ

ソ「こら逃げるなああ」

（数分後）

ソ「はあはあ、まあいいわ、でなんだっけ？」

作者「あれ何を聞こうとしたんだ？・・・まあいつか」

ソ「あつそならそろそろ締めるわよ？」

作者「いいよ〜じゃあ予告して締めるか」

葵「よ、今来たよ〜」

作者「あつもう終わるんだけど」

葵「えつお前が言った時間に来たんだけど」

作者「ああ〜（^|^-;）」

葵「どづいづことだ？」

作者「いや、単純に葵いなくてよかったから、早く始めちゃった」

葵「マジかよ」

まあ後でO S I O K I決定だな」

作者「何故に！」

葵「眠いのになわざわざ来たなら終わるから」

作者「ああ、もういいや、じゃあ締めるぞー！いっせーので」

な「次回もよろしくなの」

葵ソ作「「あつ勝手に締められた」「」

主人公紹介 (ネタバレあるかも?) (前書き)

え、中途半端な時ですが、主人公に関する説明です

## 主人公紹介（ネタバレあるかも？）

主人公

名前 朝霧葵

年齢 5才

性別 男の娘？

身長 110cm 体重 21kg

容姿 星空へ架かる橋の伊吹を黒髪にして小さくした感じ

神様に転生させられた人間

自称偽善者で、困ってる人がいると放っておけない性格である。

普段はやる気もなくともだらしなさそうな感じをだしているしかし、何かを自分で決めたことは最後までやり遂げる人である

偽善者（自称）になった理由は前世での過去に何かあったのかも知れない

また普通の人とは少し違うところが・・・？

身体能力 A+

魔力ランク A+

魔導師ランク 不明

使える技

ドラクエ、テイルズのほとんどの技

とある魔術の禁書目録の超能力から電撃使いと座標移動の能力が使える

他には今のところ金色のガツシュベルに出てくる、呪文と答えを出す者アンサーカーの能力も使える

また、前世では剣術を習っていたためか殺気や気配に敏感である頭の方は、一応大学卒業できる程度の学力はある（何故一応かという、大学を中退したから正確にはわからないから）

主人公紹介（ネタバレあるかも？）（後書き）

作者「」

ソ「ねえ、どうしたの彼？」

葵「ああどうやら、物語の大幅な道筋を忘れてるらしい」

ソ「・・・酷いね」

葵「しかも、この小説の大まかなあらすじを書いた紙を無くしたら  
しい」

ソ「ドンマイだね」

作者「復活だあああああ」

葵「おお！復活したか、で物語の流れ思い出したか」

作者「・・・」ダッ

葵「ちよっ・・・逃げやがったな」

ソ「まあ良いじゃん さてそろそろ時間だね、さて今回こそ私が締  
めるよ」

葵ソ「3」

葵ソ「2」

葵ソ「1」

葵ソ「ゼ・・な「また次回もよろしくなの」「んなっ！」

葵ソ「「一回連続で盗られた・・・orz」

中途半端はダメだと思う(前書き)

え、更新遅れてすみません、これからテストも重なるので更新が更に遅くなるかもしれません  
それではどうぞ

## 中途半端はダメだと思っ

前回のあらすじ

公園でなのはと友達に　なのはの家に行って怒り爆発　アイス買うの忘れてソラに怒られる

あれ？前回のあらすじとかいらなくね？

なのはの家族に自分の言いたいことが言えて、自己満足した次の日

ピピピピッ

カチッ

葵「ふあゝよく寝たな、今日は何しようかな？」

そう、食べ物とかはソラに怒られた後にソラと二人で買い物に行つたため買う必要もなく、学校とかも行ったないためやる事がそんなにないのだ

ソ「暇なら、アイス買ってきて〜」

と俺が何しようか朝ごはんを作りながら考えていると、ソファアに座ってテレビを見てるソラに頼まれたのだ

葵「別に良いけど・・・ていうか、昨日もアイス食っただろ、だから今日はアイスは無しな」

と出来上がった料理をテーブルの上に並べながら俺が言うと

ソ「え〜だったら、アイスじゃなくて良いから何か甘い物買ってよ〜」

とソファからテーブルに移動しながら、甘い物を欲求してくるのだった

葵「どんだけ甘い物が欲しいんだよ」

と俺が呆れていると

ソ「だって甘い物は女の子大好物でしょ」

と朝ごはんを食いながら、嬉しそうに言ってきたのだった

葵「わかったよ・・・じゃあ朝ごはん食ったら、買いにいってくるよ」

ソ「え〜一緒に行こうよ〜」

葵「う〜ん、わかったじゃあ、早くごはん食べちゃおうぜ」

朝ごはんを食べた俺はどこに行こうか迷っていた  
だいたい俺はこの辺の地理を知らないさてどうするかな？  
と俺が考えていたら

ソ「ねえ、いく場所決まってるなら、翠屋に行かない？」

とソラが服を着替えながら聞いてきた

葵「翠屋って、おい！服着替えるなら自分の部屋で着替える！」

とリビングで着替えてたソラを部屋の中で着替えさせながら

葵「翠屋かあの店なら甘い物あるだろうな・・・よし翠屋にするか」

(しかしどっかで聞いたことのある店だな)

と翠屋に向かった俺たちだが・・・

葵「・・・そういえば、翠屋ってどっかで聞いたことあると思っていたら、翠屋ってなのはの家族の店だったな・・・どうしょ、すっごく帰りたくなってきた」

そう、俺は誰かを助けたりして自己満足したりするのはいいがなるべく面倒な事は避けたいたちなのだ、だからこの前いろいろ有ったばかりで会うのは少し嫌だから帰りたいのだ、しかしそんな俺の考えなんか甘い物に目がないソラには関係なく・・・

ソ「おっ邪魔します〜ケーキ食べに来ました〜」

と勝手に入って行っただのだ

葵「はあ、しょうがないな俺も入るとするか」

葵「失礼します〜俺もその子の付き添いで来ました〜」

恭「はい、いらっしやいますっ!？」

〈恭也 side〉

最初に女の子が入って来たかと思ったら、すぐに男の娘(?)が入って来たどつかで見たことのある顔だと思ったら、入って来た女の子はこの前の子だったのだ、俺は驚いてすっかり挨拶をすることが出来なかった・・・

〈恭也 side out〉

あちゃ〜やっぱり驚いてるな、まあ関係ないけど

ソ「あの〜私たちがどこに座ったら良いのかな？」

とソラが言つと

恭「はっ！し、失礼しましたお席はこちらです」

と驚いて動きの止まっていた、恭也さんがソラの言葉に気づいて俺達を席まで案内してくれた

ソ「さて、まずは何を頼もうかな〜」

葵「おいおい、『まずは』っていったい何個頼むきだよ・・・」

ソ「え〜だってこのケーキってすごく美味しいらしいだよ、だから沢山食べたいな〜って、ダメかな？」

葵「はあ、まあいいけどな」

ソ「やった じゃあこれにいやこっちに・・・」

と俺達が話していると

恭「少しいいかな？」

といつの間にか近くにいる恭也さんが俺に話しかけてきた

葵「いいですけど・・・何か？」

恭「いや、この前は大切な事を俺に思い出させてくれてありがとう  
と思っただけ」

・・・あれは俺の自己満足なんだけどな

葵「よしてください・・・あれは僕の自己満足ですから」

恭「それでも俺は再度お礼が言いたかったんだ、それになのはと友達  
達になってくれたのは同情や自己満足のためじゃないだろ？」

葵「そうかもしれませんが、そうじゃないかもしれないですよ？」

恭「それでも、なのはと『友達になった』という事実だけは変わら  
ないだろ？」

葵「それはそうですね」

恭「だから、改めてお礼を言うよ、ありがとう」

葵「もうなのはを・・・誰か一人にさせないでくださいよ?」

恭「ああ、当たり前さ・・・さて時間を取らせたま、よし今日は家の店のケーキをご馳走するよ、もちろんタダでね」

とケーキをご馳走すると急に言い出した恭也さん、それは悪いと思  
って

葵「ええっそんなことしなくてもいいですよ」

と俺が断ろうとしたが

恭「母さんこの前の子に店のケーキをご馳走しようと思っただけ  
どいいかな?」

と恭也さんなんと俺を無視しやがった

桃「良いわね〜お母さんも賛成だわ〜」

葵「いやだから、そんな悪い「いいんじゃないの」って人が断ろう  
としてるのに誰ですか!」

と俺が恭也さんと桃子さんの誘いを断ろうとしたが俺の言葉を遮り  
ながら、店の奥から女の人が出てきた

「こんにちは、葵くん」

と言って俺に手を差しのべてきた

葵「こんにちは、えっと・・・」

「あつままだ名前を言ってなかったね、私の名前は高町美由希これからよろしくね」

葵「あっはい、よろしくお願いします」

なるほど、あの時ドアの近くにいた気配はこの人だったのか

桃「じゃあ何にする？」

とどうやらもう断る事は出来そうになくなっていた

葵「はあ、じゃあお願いしますよ、注文は「私も頼んで良い？」うおっ！ソラいたのか？」

そうソラが空気過ぎてすっかり忘れていたのだ

ソ「フンだ、良いもん空気でも別に」

葵「はあ、そう機嫌悪くすんな・・・あっ桃子さん注文良いですか？」

桃「良いわよ」

葵「じゃあ俺はショートケーキとコーヒーでソラは何にするんだ？」

ソ「じゃあ私は、チョコレートケーキとシュークリームとチーズケーキと紅茶にするね」

葵「よく食べるな・・・すいません桃子さん連れが、沢山頼んで」

桃「別にそのくらい良いわよ　じゃあ、注文はそれでいいかしら？」

葵「はい、お願いします」

と俺達の注文を聞いた桃子さんは店の奥に行ってしまった

葵「恭也さん、なのははどこにいるんですか？」

そう実は店に入ってから一回もなのはを見ていないのだ

恭「ああ、なのはなら・・・おゝいなのはちよつと出てきてくれ」

と恭也さんが店の奥に向かってなのはを呼ぶと奥からツインテールの女の子が出てきた、そうなのはが出てきたのだ

な「なに〜お兄ちゃっ!？」店の奥から出てきたなのはは俺の方を見た瞬間固まってしまった・・・一体どうしたんだ？

葵「おい、なのはどうした」あおいくん「ガハッ」

急に固まってしまったなのはを心配した俺だが心配は無用だったよ  
うだ何故なら、急に俺の名前を呼びながらタツクルをかましてきた  
からだ

葵「イタタ、おいなのは何でタツクルしてきたんだ？」

とタツクルをしてきたなのはを引き離しながら、タツクルの理由を  
聞いてみた

な「私、葵くんに会えて嬉しかったから、ついそれに・・・／＼」  
葵「それにどうしたんだ？ていうか顔が赤いけど風邪か？大丈夫じゃないなら無理すんなよ」

そう急になのはは顔を赤くしたのだ、風邪じゃなかったら良いけど  
な「・・・葵くんのバカ」

な、何故だ何故心配してバカにされなきゃいかんのだ  
後ろで恭也さんが冷たい視線を浴びさせてくるし、ソラになんか黒いオーラ見たいのが見えるし

ソ「あなたがなのはさん？私は朝霧ソラ、よろしくね？後『私の』  
葵に何で抱き着いて来たのかしら？」

何だと・・・今のタツクルが抱き着いて来たようにソラには見えただのか？ていうかオーラ怖いな

葵「ソラ、俺はお前の物じゃないぞ？後その黒いオーラ見たいの隠せ、恭也さんが後ろで少しひびってるぞ」

そうソラのオーラが徐々に強くなってきたせいで、恭也さんが少しひびってるのだ

な「そうなの、それに葵くんは私の物なの」

葵「なのは、お前も違うぞ、俺は誰の物でもないぞ？後、目だけ笑ってないから少し怖いぞ？」

そうなのははなのはで顔は笑ってるのに目のハイライトが消えてる  
せいで、少しではなくて凄く怖いのだ

ソ「葵八、ワタシナンドカラ、アナタハ葵ニクツツカナイデネ？」

な「ソツチ、コソワタシノ葵くんニクツツカナイデナノ」

言葉が片言なのと二人のオーラのせいで、恐すぎる・・・  
恭也さん助けて

と俺は恭也さんの方を見たが

恭「そんな俺達のなののがあんなんになってしまったなんて・・・」  
orz

と落ち込んでいた、役立たないな恭也さん

さてこの状況どうしようかな・・・ヤバい考えつかねえ  
と俺が考えいたら

桃「は〜い、お待ちどうさま〜ご注文の品ですよ〜後なのはにもね  
」

すげえ、桃子さんがきた瞬間にオーラが消えたぞ、ケーキが凄いの  
か桃子さんが凄いのかわからんが、桃子さんグツジョブだぜ

葵「じゃあ、ケーキもきたようだし、食べようぜ？」

ソ「うん、わかった」

な「私もわかったなの」

葵「じゃあ」「」「」「ただきます」「」「」

とケーキを食べ始めた俺はなのはに気になってた事を聞いてみた

葵「なのは、昨日の今日だけど一人になってないか？」

な「なつてないなの」

とにこにこしながら言ってきた、どうやら恭也さん達は約束を守ってくれたみたいだな

葵「じゃあ、今は家族で過ごせて幸せか？なのは」

な「うん……だけどまだお父さんが入院してるから少し寂しいなの……」

と少し寂しいそうな顔をしながら言ってきた

恭「なのは……」

そんななのはの言葉を聞いた恭也さん達も寂しいそうな顔していた

葵「そうか……早くお父さんが退院するといいな」

な「……うん」

恭「……そうだな」

そう言って返事をしたのはと恭也さんは本当に寂しそうだった

葵ソ「「ご馳走様でした」」

桃「また、来てね」

な「またきてなの」

恭「・・・またな」

美「まっ たね」

とケーキに食べ終わった俺達はなのはの家族に見送られながら、店を後にした

このまま、帰ろうとしたが土郎さんについての話をした時のなのは達の顔が忘れられず

葵「・・・ソラ帰りに少し寄り道したいんだが、いいか？」

ソ「いいよ、葵のやりたい事なんかわかってるからね、どうせ高町さん達のお父さんをどうにかしようとおもってるんでしょ？」

葵「まさか驚いたな、俺のやろうとしてることがわかるなんてな」

ソ「まあ、何て言ったって私は葵のデバイスですから」

葵「俺のデバイスだからって言うのは関係ないだろ、しかし士郎さんは何処に入院してるんだ？」

そう、士郎さんが何処に入院してるかを俺は知らないのだ

ソ「そうね、何処に入院してるのかしら・・・」

葵「うーん、俺の能力じゃさすがに何処にいるのかはわからんしな・・・」

そう、俺が持つてる能力は超能力少しと魔法くらいなのだ・・・

ん？まて俺が頼んだ能力って魔法だけか？

葵「あっ！」

ソ「どうしたの？」

葵「そういえば忘れてた、俺『答えを出す者』の能力を持つてるんだった」

ソ「そうなの？ていうかその能力って何？」

葵「確か、全ての事の答えがわかるとかいう能力のはずだ」

ソ「じゃあ、その能力で」

葵「そう、士郎の入院してる病院に行けばいいんだ」

ソ「じゃあ、早くいこー」

（移動中）

さて、今俺は士郎さんの病室前にいる、えっ飛ばし過ぎだっけ？そんなのは作者に言え

葵「さて、入るか」

ソ「そうね」

と二人で病室に入ったわけだが

葵「っ！これは酷いな」

そう病室に入った俺達を待っていたのは身体中に包帯を巻いて、点滴に繋がれた士郎さんだった

ソ「そうね、身体中にダメージを負ってるわ、一体何をしたらこうなるのかな」

葵「・・・あの時と同じだ・・・」

ソ「葵？どうしたの？大丈夫？大丈夫じゃないなら一回出直さない？」

そう余りの酷さに俺は、精神的に来てしまったのだ・・・

葵「ああ、だ、大丈夫だ俺は早くなのは達の悲しみを取り払うんだ」

そう自分いい聞かせながら、俺は精神を落ち着かせると早速、怪我を治すために色々考え始めた

葵「さて、どうするかな、ただ体力と怪我を治すなら回復魔法をかければいいが、おそらく内臓も弱ってるだろうな」

それにしても、物凄い生命力だな  
よっぽど家族と別れたくないんだろうな

葵「仕方ない、俺の魔力と少しの生命力を混ぜて、完全に治すための魔法を創るか」

ソ「生命力を混ぜるはダメ！もしかしたら、間違えて生命力をほとんど使ってしまったら死んじゃう」

葵「大丈夫、俺はまだまだやる事がたくさん有るんだ、こんなところじゃ死なねえよ」

そうさ、まだ物語は始まってもないのにたった一人救うのに、迷うものか

葵「いくぜ、我に流れる生命の源を媒体にしてかの者に力与えん、完全回復呪文、『ライフ・ギフト』！」

と俺が呪文を唱えると土郎さんに向かって、優しい光が俺から流れ

た、そして光が流れ終わると

「ん、こじは・・・」

と土郎さんが目覚めた、良かった成功したみたいだな

葵「気分はどうですか？」

と俺は目が覚めたばかりの土郎さんに体の具合を聞いてみた

中途半端はダメだと思う（後書き）

作者「さて、今回の話は次回のために書いたんだよね」

ソ「そうなの？」

作者「うん、そうだから結構考えたんだけどね」

葵「その割には相変わらず文章は酷いけどな」

作者「グサツ」

ソ「しかも、なんか無理矢理感、満載だしね」

作者「グサツグサツ」

な「そんなに言わなくてもいいかもなの」

作者「おお、ここに天使が」

な「確かにノロマで酷い文でペース配分も出来ないダメ作者さんだけど……」

作者「君の言葉に一番傷ついたよ！」

な「そうなの？まあ別にどうでもいいなの」

葵ソ「確かにどうでもいいな（ね）」

作者「あれ？なんか皆からの扱いが酷い気が・・・」

な「気のせいなの、あっ！そろそろ時間なので、いっせいで！」

葵ソな作「・・・また次回も宜しくな（ね）（なの）」「」「」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6945x/>

---

とあるリリカルな転生者

2011年11月24日02時49分発行